



No.99 2020.12.25

明石市コミュニティ・スクールだより
人をつなぎ 未来をつなぐ 明石のコミュニティ・スクール

コミコミスクスク

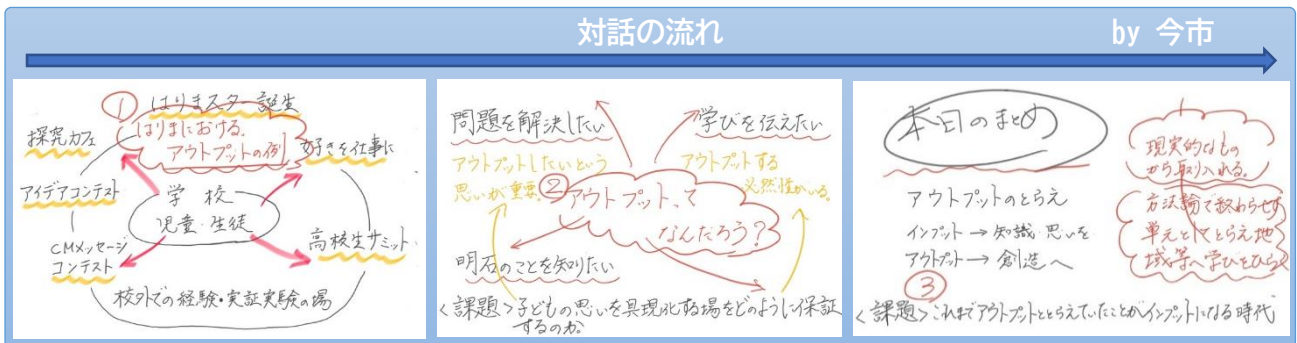
KOMIKOMISUKUSUKU
明石市教育委員会事務局学校教育課



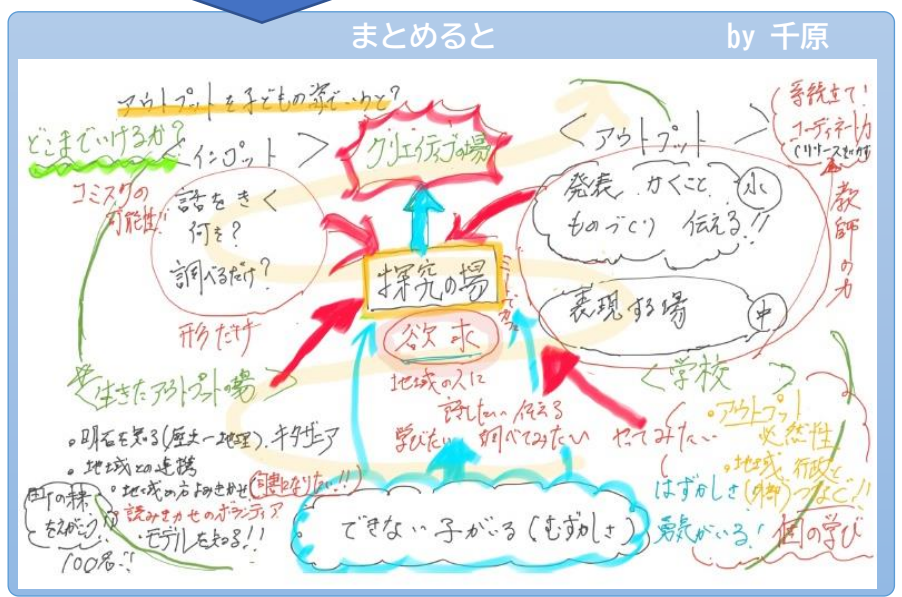
コミスク TwitterQR

Meet de 対話 Part3 その3を終えて

12月8日・15日・12月22日の3日間の3回シリーズで開催した Meet de 対話 Part3 「播磨から仕掛ける「未来の教室」～「未来の教室」キャラバン in 播磨～」に学ぶを無事に終えることができました。ありがとうございました。その1では、“経済産業省浅野大介室長の「未来の教室」プロジェクト～教育イノベーションの政策の現在地点～”を切り口に、その2では“国際大学の豊福先生の「ICT化で子どものチャレンジの可能性はどう広がるのか”を切り口に、その3では“播磨ひとづくりコンソーシアムの前田先生の「社会の中での挑戦の機会”を切り口に対話を行うことができました。今回の3回の対話の中でキーワードとして“インプット&アウトプット”が浮かび上がってきたように思います。その3の参加者の中でもアウトプットのとらえに大きな幅があり、授業→単元→カリキュラムの中でアウトプットをどうとらえるかを学校、地域、保護者の中で共有することがこれからの子どもたちの学びをデザインしカリキュラムとしてつないでいく上で必要なのではと感じました。Meet de 対話 Part3 その3の流れは下記のとおりですが、詳しくは本所指導主事より報告していただきます。



また、Meet de 対話 Part4として国語科「町の未来をえがこう」の実践例をベースにこの教材が生きる活用法をさぐっていただけると計画しています。詳しくは次号あたりでご紹介できると思います。「町の未来をえがこう」の持つ可能性を教職員と地域の皆さん、保護者のみなさんで引き出せたらと思っています。



これからの学校が担う役割って!?

Meet de 対話 Part3 (第3回) は、“播磨ひとづくりコンソーシアムに学ぶ” 前田真吾先生のプレゼンの内容について考えたことをもとに参加者の皆さんと対話を深めていきました。清重教育長も含め 10 名の方に参加いただきました。

今回は対話の題材がダイナミックなこともあり、参加された皆さんが多様なご意見を出してくださいました。参加された方の意見をもっと聞きたいと思うほどあっという間の時間が流れました。今回は次の二つの話題について、皆さんに深めていただきました。

- 「アウトプット」している子どもの姿とは、どのような姿か
- 地域や企業等、外部とのつながりをどのようにつくっていくのか



一つ目の「アウトプット」については、参加された先生方から授業場面での子どもの具体的な姿が出されました。対話の前半は子どもが考えたこと、ワークシートに記述したことを発表したり、表現したりすることが「アウトプット」であるという考えが出されました。子どもたちがそのような「アウトプット」をするためには、教師がその機会を意図的・計画的に設定したり、系統的に指導したりすることが重要であるという話題になりました。しかし、次第に「アウトプット」の質に焦点化されていきました。最終的には、子どもが「相手に伝えたい」という欲求や願い、そして他者意識をもつことこそが「アウトプット」の核にあるのではないかという議論になりました。私は「何をどう表現するのか」という内容や技能と「伝えたい、聞いてほしい、伝えないと！」という必然性がセットになってこそ、真の「アウトプット」と言えるのではないかと考えました。また、北本 CS コーディネーターからは、探究場面において、「知ると創る」のサイクルで問題解決が進むとした時、「アウトプット」は正に創る場、つまり得た知識や情報を基に「創造すること」とあるという話も出ました。

二つ目の、学校がどのようにして地域や企業等、外部とつながっていくのかということについては、「アウトプット」と関連が深い話となりました。つまり、子どもたちの知的な欲求や願いに寄り添っていくと必然的に、学びの場が学校や教室を飛び出し、よりダイナミックなフィールドへと広がっていくのではないかと話になりました。そのような広がりが生まれた時、教師が物怖じせず、地域や企業等との連携を築いていくことが重要であるという結論に至りました。つまり、これからの教師の役割は、知識や技能を効率よく伝えることだけではなく、様々なフィールドで期待できる子どもの学びを「コーディネート」することだと思えます。“播磨ひとづくりコンソーシアムに学ぶ”の中で前田真吾先生も「これからは学校、教師の役割が今までとは異なってくる」と言われています。その具体的なイメージが参加された皆さんとの対話で明らかになったと考えます。

私は「アウトプット」に示されるように、様々な言葉のイメージを勝手に抱き、他者とのずれに気付かずに子どもと向き合ってきたのだと自省しました。Meet de 対話によって校種など、垣根を越えた方との対話を通して、対話の意義はもちろん、わかっているつもりで用いている言葉の意味や本質をあらためて探っていくことの必要性を実感しました。参加していただいた皆さんに感謝するとともに次回の機会にまたあらためてお会いできることを期待しています。

(文責:本所)